

95号

g-kawaraban@googlegroups.com

学園町 かわら版

発行人 / 学園町自治会会長・人見良一
投稿・連絡先 / 学園町2丁目8番地14号
電話・FAX/421-2336
企画編集 / 学園町自治会広報委員会
編集長 / 浜名 純

購読無料・各戸配布／隔月刊行

『学園町らしさ』の継承と保存について

東大大学院で研究する

玄田悠大さんにお聞きしました

『学園町らしさ』とは何だろうか？それがどうして生まれ、継承されてきたのか。それを研究しているのが玄田悠大さん（東京大学大学院工学系研究科博士後期課程）です。玄田さんに取材しました。2回に分けて掲載します。玄田さんは「学園町の戦前から1980年代、そして現在に至る資料を探しています。もし資料をお持ちの方がいたらお見せいただきたい。また、多くの人からお話を伺いたいです」と希望しています。取材を終えた時、フランスの画家ゴーギャンの「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこに行くのか」という絵画が思い浮かびました。

——学園町のまちなみや景観はいかにして作られたのか。その理念が、どのようにして継承されてきたかを研究なさっています。なぜ学園町を選んだのでしょうか。

神社、仏閣など近世以前にできた建造物は価値がはつきりと分かっており、法制度も含め保存もやりやすくなっています。近代以降は、まだ新しいということもありその価値が分かりづらいいと思います。現在の社会状況の中で、

近代に誕生したまちなみが急速に崩壊しつつありますが、その価値や保存継承について研究を通してお伝えしたいというのが大前提にあります。

その上で学園町を選んだのは、どんな思いでこの地域を作ったかというコンセプトが明確だったからです。鉄道会社が郊外の駅の周辺に「田園都市」を作る例はたくさんありますが、まじくくりや生活に対する考え方を住民が共有するということはありません。どう

いう考え方でその地域が作られたのが重要です。そして、その理念を繋げようという人がいて時を越えて継承されていったのはなぜか。それが未来に残るためにどんな仕組みがあるのか、といったことを研究することで、地域の価値保全の一助になればと思います。

学園町ができた頃は、大正新教育の動きがあった時代です。学校と同じ理念と考え方を持った

人たちが学校を核にした生活圏を作りました。成蹊学園、成城学園、玉川学園、そして自由学園の4つが挙げられます。その中でも、こちらの地域の歴史的な背景などが興味深かったこと、意外とこの地域の研究がされていなかったことが、私が学園町について研究を始めるきっかけとなりました。

大正新教育の動きと一緒に「田園都市」という概念も海外から入ってきました。イギリスのエベネザー・ハワードが提唱したもので、20世紀の3大発明の一つであるという人もいます。当時のイギリスは、急速な工業化と近代化で工場労働者が都市に集中するようになりました。首都ロンドンも拡大を続け、人口過密や工場から排出される煤煙、騒音など環境悪化が深刻化しました。そこで、郊外の豊かな自然の中に、工場とそこで働く労働者のための良好な住宅を作るというものです。イギリスの田園都市理論は、道路や建物などのハード面ばかりではなく、どうやってコミュニティを作って皆が一緒に暮らしていくかというソフト面を重視していました。

日本にも田園都市の流れが入ってきたのですが、先ほど話したように鉄道会社が沿線の土地の区画整理をして住宅地を作るためのものになりました。緑も含めて整然とした町を作るというハード面ばかりが強調されたわけです。ところが、この学園町を中心とした地域は元々の田園都市の理論に近く、ソフト面でもいろいろな取り組みをしています。その意味でも重要な場所なのではないかと思いました。具体的には

自由学園の父兄に土地をお願いし、『婦人之友』の愛読者にも分けたということから始まりました。羽仁もと子は「どういう人がそこに住むか。それは大切な問題である」と書いています。「友の会」やセツルメント活動も行われました。コミュニティも含めて地域づくりを意識してやったという事例は他にありません。

そのあと、戦後になって住んだ方も、この地域の良さは何かを分かってくつて来た人が多いと感じています。自由学園の卒業生というくくり以上に何かベースとしてあり、それに共感した方が新たに住まわれて、地域の中で一緒に活動し、次の世代に繋がれていくという流れがあるような気がします。

——最初に学園町に足を運んだ時の印象はどうでしたか。

2020年に博士研究の現地調査で来ました。学園町のまちなみや自由学園の中を案内していただきました。ちなみにこの年、自由学園南沢キャンパスの遠藤新の建築群が「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」に選定されました。この選定は、私も会員のモダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査や保存のための国際組織であるDOCOMOMO（ドコモモ）の日本支部が行っているものです。

この町に足を踏み入れた第一印象は「良く残っていたな」というものでした。緑があり区画もすっきりしていて、同じような雰囲気や地域で共有しているなと思いました。なぜこういう地域が残ってきたのかと興味を掻き立てられました。（次ページに続く）



——玄田さんは論文の中で、「地域形成理念」という言葉を用いています。これはどういう意味なのでしょう。

ある主体（者）が新たな場所に入って地域をつくる時に、どういう地域をつくりたいかという理念があり、それに基づいて地域がつくられているはずだという前提に基づき、それを地域形成に資する理念、すなわち「地域形成理念」として設定しています。その概念がどうしてできて今に至ったかという形成・展開を分析することで、一つの流れが見えるのではないかと。つまり、これから地域でできることや将来どうしていくのかがいいの参考になるのではないかと考えています。

例えば、私が住んでいる武蔵野市にアントニン・レーモンドという著名な建築家が建てた建物が残っています。1934年に建てられたもので、所有者の赤星鉄馬の親族から、ナミュール・ノートルダム修道女会に所有が移り、さらに2021年に武蔵野市に譲渡され、建物が保全されることになりました。普通なら建物が全部取り払われて、分譲マンションなどになっているところでした。その保存活動に私も携わったのですが、その過程で実は修道女会は、その建物がレーモンドの設計による文化財的価値がある建物だとは知らずに住んでいたことが分かりました。それでもちゃんと維持さ

れてきました。何でだろうと考えてしまいました。「これは有名な先生が作った建物で価値があるから大切に使ってくださいね。後世に残しましょう」と専門家に言われたわけではありません。それは、日々の宗教的活動を通して、掃除なども含め生活のためにメンテナンスをきちんとしていたからではないか。持ち主や住んでいる人が変わっても何か繋がっているものがあって維持できたのではないかと。イメージが沸きました。調べてみると、建物が赤星鉄馬からキリスト教系の学校に通った子どもがいて、アメリカに住んだことのある親族に渡り、そこからさらに修道女会に移るという経緯で、共通の考え方や思いが繋がってきたからこそ守ってこられたのだと思います。文化財だから守るというのではなく、その場所や地域をどのようにして引き継いでいくか、そのためには何が必要に

なるかを見ていくことが重要だと思いました。時代のフェーズが急激に変わりつつある今のタイミングで何かやらないといけないのではないのでしょうか。

今後同じように学園町らしさが残って欲しいと思っています。地域の考え方を共有した多くの方々がこのに住まわれていくと、文化的な意味でも日本にとつて誇りになるものが継承されていくのではないかと思います。

★プロフィール 1929年生まれ。京都大学工学部卒業後、京都大学大学院工学系研究科で景城環境計画学研究室に所属。空間デザインなどを扱う会社を経て、独立行政法人国際交流基金に勤務。東京大学まちづくり大学院修士後、現在、東京大学大学院の博士後期課程として都市デザイン研究室に在籍し、参加型・協働型まちづくりとその地域・建物の形成過程に関する研究や提案をしている。

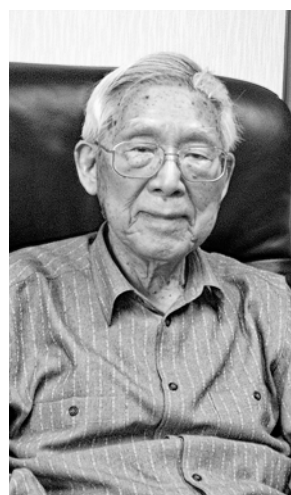
高月内科クリニックが閉院 30年間、ありがとうございました

学園町のみなさんの健康を長年見守ってきた「高月内科クリニック」が閉院しました。この地に開院してから30年。高月英夫先生、ありがとうございました。

高月先生は1929（昭和4）年11月、愛媛県東宇和郡野村町（現西予市）生まれ。旧制松山高校から九州大学医学部に進学、卒業後、

東京の病院で医師の道を歩み始めました。5年ほど勤めた後、三鷹中央病院に移り、さらに西東京市の佐々病院で長く働きました。そして、佐々病院の副院長だった1992（平成4）年5月、62歳の時に学園町で開院しました。

「当時は清瀬に住んでいました。そろそろ開業しようと思って探し



ていたところ、たまたま新聞広告で、この土地を売り出していることを知りました。気に入ってすぐに決めました。こんなによい環境が残っていると嬉しい。当時は今とは比べものにならないほど緑が豊かでした。

「内科だけではなく、ありとあらゆる種類の疾患を診てきました。大切なのは自分で患者さんを抱え込まないことです。疾患をきちんと確かめ、ここでの治療が難しいと判断した時は、その道の専門医に診てもらうことを心がけてきました」。こうして多くの住民の診療に携わってきました。開院した時に学園町の住宅地図をもらったので、来た人をチェックしたら、ほとんどの住民が診察を受けに来たということです。

また、長年田無警察署の検案医を務めていました。検案とは医師が死体に対して、死亡を確認し、死因、死亡推定時刻などを総合的に判断する作業です。

ずっと元気に働いていましたが、今年1月、家で転倒し骨折したのをきっかけに約2週間入院。退院後、今まで通りに動くのがき

つくなり閉院を決意しました。閉院は3月4日。ちょうど開院30周年の節目の年でした。

その30年を支えてきたのが妻の優子さん（89）。優子さんのお父さんも旧制松山高校から九州帝大医学部を卒業、中国の上海で医師をしていた時に優子さんが生まれました。上海から松山に引き上げ、松山で高校を卒業しました。優子さんのお兄さんも九州大学医学部卒だったことから、高月先生と知り合ったということです。

優子さんは「（夫は）口数が少なく、ほとんどしゃべらない人なので、開業向きではないんです。よ。続けていけるだろうかと思っていました」と笑います。「皆さんからこんなにもたくさんの支持と信頼を受けて、長くやっていくことができました」と高月先生。

どうか、これからもお二人で元気にお過ごしください。



地域密着型コンサート@みらいかん 「コミュニティ活性化の試み」

4月23日に自由学園みらいかんで開催されたミニ・コンサートは、主催者のねらいどおり、本当に地域のみんなが幸せになれるイベントになりました。

午前の部は「親子で楽しむアンサンブル」。コロナ禍で乳幼児を連れての遠出がますます難しくなっているパパ・ママにとって、本物の音楽に触れることのできる貴重な機会です。したがって、すぐにチケットは完売。午後の一般向け「音楽の贈り物」も、気付いた時には売り切れであったという

人が多かったようです。

生の楽器の音が、これほど豊かなものであったとは！ それが、午後の最初の曲、エルガーの「愛のあいさつ」を聴いた時の印象です。この二年間、家に籠ってコンサートへ足を運んでいなかったことを、改めて思い出しました。演奏は、ヴァイオリン（花岡沙季さん）、クラリネット（山澤陽子さん）、チェロ（山澤慧さん）の三重奏。ともに東京芸大を経て海外での演奏経験も積んだ本格派です。入念な編曲により、懐かしい



唱歌集から最後の「情熱大陸」まで、弦楽器と木管楽器の柔らかな豊かな音色が、みごとに溶け合っていました。

この三人のアンサンブルは、自由学園幼児生活団の仲間という縁が核になって結成されたとか。そういえば、この豊かな響きを伝えてくれる「みらいかん」の床や壁の木材は、自由学園の生徒たちが植林の演習で育

て上げたものと聞いています。このミニ・コンサートは、東京芸大自由学園そして学園町（協賛）という、三つのコミュニティの輪が組み合わさって実現した企画なのです。

コンサートの後での懇親会では、この三つの輪がさらに溶け合いました。「また来年、こんなイベントがあればいいのにな」と言いながら、三々五々家路をたどりました。(O・S)

コロナ禍の卒業式 目標に向かって 努力を続けよう

市立南中学校
小川高弘校長

コロナ禍で3回目の春を迎えました。令和3年度も、学校の教育活動には「感染拡大防止のため」という様々な制約がありました。が、「リスクが高い」から中止にするのではなく、「どうすればできるのか」を考えさせられました。3年生にとっては最大の行事である修学旅行、1・2年生のスキー教室は残念ながら中止となりましたが、生徒たちは、自分たちが置かれた環境で、全力で取り組んでくれたと感じています。

3月末にまん延防止等重点措置は解除されましたが、規模縮小・時間短縮の中、卒業生とその保護者、在校生代表、教職員だけで第49回卒業式を行いました。147名の卒業生を送り出しました。卒業生への励ましと地域への感謝を込め、式辞ではパラリンピックに5回出場し、日本人初の金メダルをはじめ、10個のメダルを獲得した大日方邦子さんについて紹介しました。

大日方さんの競技生活は、成功ばかりではありません。大日方さんは「スキーを続けていると、いろいろな壁にぶつかる。一つの壁を乗り越えても、その先を見渡せば、新たな壁が立ちほだかっている。壁にぶつかった時こそ、飛躍するチャンス。時間はかかるかもしれないけれど、自分を信じて努力すれば、壁なんて破れる。」と言っています。

壁を避けて、成功できそうなことだけを選んでいても、自分の成長はありません。壁にぶつかっても自分の夢を諦めずに、勇気を振り絞って挑戦してこそ、未来が見えてくるのです。

皆さんはこれまで、共通の目標に向かって、集団で取り組み、お互いに励まし合ってきました。これからは、個人の目標に向かうことが増えてきます。失敗しても、挫折しても、簡単にあきらめずに、目標に向かって努力を続ける人になってください。

南部地域センターからのお知らせ ①

★なんぶまなぶシリーズ

①「『ヨガ教室関係①～⑤』

①「夕方YOGA教室」(金曜クラス)

6月10日・17日・7月1日・8月15日・8月5日

「7:30～18:30 参加費500円。定員10名、講師：ヨガインス

トラクター、健康運動指導士中村陽子

②「ヨガ男塾」

6月10日・17日・7月1日・8月15日・8月5日(9:00～20:00)

③「日曜ヨガ教室」

6月19日・7月3日・17日・8月7日

1部10:00～11:00

2部13:00～14:00

④「健康体操」

6月19日・7月3日・17日・8月7日

1部11:30～12:30

2部14:30～15:30

⑤「夕方YOGA教室」(火曜クラス)

6月14日・21日・28日・7月5日・12日・19日・26日・8月2日・9日 17:30～18:30
※上記②、③、④、⑤の【参加費】、【定員】、【講師】については、いずれも①と同一。
※各イベント問合せは次ページの「南部地域センター」からのお知らせ②参照

気軽に「健活」!! 「楽になる身体教室」に参加しませんか

「楽になる身体教室」をご存じでしょうか？ 歩くのがきつくなったり人や日常のちよつとした動作にもつらさを感じる人、いつまでも若々しさを保ちたい人、尿漏れが気になる方……などを対象にした「今より「楽」に動けるようになる体操」です。指導するのは健康運動指導士の森下直子さん。4月に第1回を開講、今後は月に2回開催する予定です。あたたかぜひ参加してみませんか。

森下さんは、自由学園出身。(財)日本エアロビクス連盟指導専門委員や作新学院大学非常勤講師などを歴任、NHKのBSエアロビクスにも出演し指導しています。学生時代にひよんなことからウォーターエクササイズの世界に魅せられ、1993年、本場のアリゾナへ単身渡米し、現地のウォーターエクササイズ指導者ライセンスを取得。帰国後は「プールは泳ぐ場所」という認識だった日本で、ウォーターエクササイズ普及活動をスタートさせました。2015

年からは、痛みのない身体づくりを目的としたオリジナルプログラム「楽になる身体教室」を都内各地で開講し、2017年からはスローエアロビクス教室を開催しています。2021年からは都内で「ひめトレ」の教室も始めまし

た。ひめトレとは、骨盤を正しい位置に導き、さらに骨盤底筋を鍛えるものです。これによりウエストや下腹部を引き締め、「美姿勢」を作ることができるというものです。

「楽になる身体教室」では、1時間ほどで楽に身体が動くようになるための基本プログラムを多く用意しているのははじめ、「身体を支える足をほぐす」「痛みのない楽な美しい歩行」「腸をほぐしてコリを取る」「縮んだ身体を伸ばす」などの参加者の希望に沿った試みも実施しています。

今回は7月6日(水)午前11時から、ひばりヶ丘団地にある南部地域センターで開かれます。また、7月は同センターで20日(水)午前11時から開校予定です。多くの人の参加をお待ちしています。参加費1500円。現在は女性対象ですが、今後軌道に乗ったら男女含めて多くのシニアに参加していただける教室にしていきたいとのこと。

申込・問い合わせは森下さんまで。電話080-4333-2343

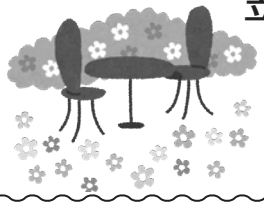
atohanaochan@gmail.com

なお、森下さんのHPをぜひご覧ください。以下のURLです・

<https://naoko.localinfo.jp>

花だより⑦

中央分離帯に咲く
かれんな雑草たち
立川まり



今日は少しオタクっぽい話になってしまいましたが、私の心躍る場所の話からしたいと思っています。それは道路の中央分離帯です。中でも青梅街道の東伏見交差点などは大好きです。朝早く市場に行く時、いつもそこで信号待ちをするのですが、毎回とてもわくわくします。

そこは小さな草むらです。結構頻繁に手入れ(刈込)をされているのですが、雑草を短く刈り取ったと思ったら次の週にはふさふさのグリーンに戻っているのです。

そのたくましさも好きだし、素朴な花達がとてもかわいいです。4月にはつくしが生えていました。先日はシロツメクサ(クローバー)の仲間がとてもきれいに咲いていました。ほかに名前前のわからないものもたくさん。

また狭い中央分離帯ではコンクリートの隙間からエノコログサ(通称猫じゃらし)が他の雑草に邪魔されずに360度葉を伸ばしている姿が見られます。雑草は家庭の庭に生えてくると邪魔に思うけれど、草むらや道路で見るとこんなに心躍るのはなぜでしょうか。私だけかなと思うのですが……でもそうではないかもしれません。

市場では通称ペンペン草や、猫じゃらし、クローバーなど、初めは誰かが抜いてきた?と思えるようなものが、段々丈が長くなり花束に見えるようになってきて、流通量も増えてきます。

考えてみれば最初はみな野原から花を摘んでいたものを長い年月をかけて園芸用に改良したのだと思います。毎日フランス料理もいでしょうが、たまにお茶漬けが食べたくなるみたいなものでしょうか。完成された園芸品種の花ばかりだとたまには雑草みたいに素朴な花が心休まることもありま

南部地域センターからの お知らせ ②

★なんぶまなぶシリーズ

《2》ヨガ教室以外のイベント

★ベビーマッサージ

6月13日(月)・7月11日(月)

10:00~12:00 参加費

2000円・定員4組。講師:飯岡祐子。生後2か月~1歳前後の

赤ちゃん和妈妈さん・妊婦さん

★「バクさんとその仲間と音楽と

6月26日(日)・7月31日(日)

開場13:00 13:15~15:00

定員40名、参加費500円

★60歳からの音楽で脳トレ体操

6月27日(月)・7月25日(月)

10:15~11:30定員10名。参加費

1000円

★妊婦さんとママのためのこころ

とからだのセルフケアレッスン

6月27日(月)・7月25日(月)

10:00~11:30定員8名(親子

参加は4組まで)参加費500円。

対象:妊娠中の不安な気持ちを共有したい方、マタニティライフを

ナチュラルなケアで過ごしたい方

★なんぶおしゃべりサロン

7月3日(月)・8月7日(月)

13:30~15:30参加費1000円。

対象者:地域にお住まいの高齢者

※各イベント問合せ

南部地域センター

(指定管理者 株式会社セイウン)

042-451-2021

Higashikurume_nanbu@s-seiun.

co.jp

042-423-8646